

二〇二三年度

国語

《注意》

- 一、問題はこれから二十二ページにあります。始まりのチャイムが鳴ったら必ず確認してください。
- 二、問題を解く前に、解答用紙に受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
- 三、答は、すべて解答用紙に書いてください。句読点や記号などは字数にふくめます。
- 四、解答用紙の一行のわく内には二行以上書かないようにしてください。

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

こんな事は毎日だった。砧きぬたきぬ子が朝と晩の散歩の他に、昼間三時から四時ごろの間、海岸を散歩するのを日課として知っていることを知っていたので、私は学童たちを集めて海水浴場の外れの方でいつも彼女かのを待っていた。

砧きぬ子はたいていの場合一人で散歩したが、ごくたまに母らしい人に連れられて姿を現した。そんな時は、私たちは何もしなかった。彼女がこちらに近づいて来ると、私たちは海の中へ避難ひした。そして板子かにつかまって、波にゆられながら、遠くの方から彼女をうかがった。

「あいつ、今日はやつつけられないでしゃくだな！」

私はそんな風に言った。他の四、五年生もみな、みようにぎらぎらした目を彼女の方へ向け、

「大人おとなといっしょに来ていやがる！ よおし、明日覚えてろ！」

そんな事を言った。私たちはまるで彼女にうらみを持っているかのようなうであった。いかなる種類しゅるいの仇敵きうてきか知らなかった。しかし、不倶ふぐ戴天たいてんという言葉の意味に近いものを、彼女が持っていることは明らかだった。そのままにはして置けないような美しいものを、その都会の少女は持っていたのである。砧きぬ子は色が白く、目が大きく、かみはおかっぱにして、いつも着物を着ていた。私たちの目には彼女はひどく大人びて見えた。

〈注3〉「角屋かくやの離はなれに、この魚をとどけて来い！」

私は父から命じられた。

「取り立ての、とれとれですって言ってな。そして五十銭ごじゅうせんもらって来い」

そんな風に父は言った。

夕方だった。私はしりごみした。その魚は、砧家から今朝父が依頼いらいされて釣つって来たものであることは、私も

知っていた。しかし、毎日のように彼女をやっつけている手前、私には彼女の家に行くことは有り難い役目ではなかった。

私は何とか理由をつけて、この役目から放免めんされようと思った。しかし、

「行って来いと言ったら、行って来い」

と、父から頭を一つこづかれると、その命令に従う以外仕方がなかった。

私は二、三匹ひきの魚を入れたザルを持って、砧家へ出かけて行った。角屋の表門から入り、勝手口の横を通って、

離れの縁側えんの方へまわって行った。

問二

「魚を持って来ました」

私は縁先の物干しの棒のところに立ち止まって、よそ行きの言葉で言った。そこからは内部がのぞかれなかった。家の中に、だれが居るか全然わからなかった。私はただ家の内部へ向かって、声をかけたのであった。

何の返事もしなかった。

「魚を持って来た！」

こんどは、私は大きい声でさげんだ。

と、砧きぬ子の顔が縁側からのぞいた。

「あら、お魚？」

彼女は言うのと庭へ降りて来て、ザルの中をのぞきこみ、

「まだ生きているわ」

そう言うてから、

「母さん、お魚ですって！」

と奥にさげんだ。

「何て言うお魚」

彼女は言った。

問三

私は口がきけなかった。彼女は私より少し背が高かったが、近くでみると、いつも私が思っていたよりずっと子供っぽかった。

私がザルを地面の上に置くと、彼女はそこにしゃがみこみ、小さい棒切れを拾って、それで魚のはだをつついた。そんなことをしている彼女を、私は上から見降ろしていた。私はそれまでに、そんなきしゃな白い手首を見たことはなかった。首も細く、その細い首の上にオカッパのかみがきちんとそろえて切られてあった。

間もなく、彼女の母が、これも縁側から降りて来ると、

「ごろうさんね。おいくら」

と言った。

私はこの魚の代金を受け取るのが、何かはずかしかった。ひどく卑賤な行為（注）ひげんないのような気がした。

「いいです」

と私は言った。

「よくはないわ。おいくらですって」

問四

「父ちゃんが上げておいでって——」

私はいきどおったように言った。すると、

「まあ、それは、お気の毒ね。よくお礼を言ってちょうだいね」

彼女の母は言った。

私が彼女の母と話をしている間に、きぬ子は私のところから離れ、縁側から部屋の中に上がって行った。

私はそこを立ち去る時、初めて離れの家の中をのぞいた。きぬ子が南向きの縁側に面した部屋のすみで、小さい机に向かっていた。そのうしろ姿だけが、私の目に入った。何か雑誌でも読んでいる様子だった。

私は夕食の時、父からひどくしかられた。私は代金の五十銭を、途中でどこかへ落としてしまったことにしていた。

「使い一つできないでは困るじゃあないか」

父は、いつまでも同じことを、がみがみ言った。

私が父からしかられている最中、角屋の女中が、^{〔注6〕}砧家からたのまれたと言って、パインナップルのかんづめを

一個持って来た。

「代金を取っていただけなので、これがお礼ですって」

と女中は言った。女中が帰ると、私はまた新しく父からどなられた。

「どう言う了見で、うそなどつきやがるんだ」

父は私をにらみつけたが、しかし、父はこんどは長くはおこっていなかった。魚二、三匹と、めったにお目にかかれぬ果物のかんづめとは、決して損な取り引きではなかったからである。

私は、夕食の膳を離れると、すぐ家を出た。

足は海岸に向いた。^{問五}もう浜はとっぷりと暮れて、海面にはいくつかの漁火がまたたき始めていた。

私は、半時間ほど砂の上にこしを降ろしていたが、そのうちに、ふいに、砧きぬ子の姿が目にかんできて、いまも彼女が昼間見かけた南側の部屋のすみで机に向かっていそうな気がする、私は立ち上がって浜を角屋の裏手の方に向けてつつ切って行った。

角屋の離れの横手は石堀いせになっていて、一方が海に面し、一方が浜に面していた。私はその石堀のそばへ行くと、そこにあった松の木のあらいはだに手をかけた。幹の中ほどのところまでよじ登るとそこから砧一家の住んでいる離れの内部はまる見えのはずであった。

〔注8〕 私は一間半ほど松の木をよじ登ったが、しかし何も見えなかった。家人は全部外出していると見えて、家の中の電とうは消えてまっ暗だった。

私が再び松の木を降りようとした時、下の方で人の話し声がした。私は思わず身を固くした。五、六間離れた松林の中のはだか電とうの光がそこら辺りまでのびていて、そのうす明かりの中に二、三人の人が見えた。

問A 私はいさばらく、目をこらしていたが、その三人が、砧きぬ子と彼女の母と、もう一人見知らぬ若い男の人であることを知ると、私は身動きができなくなった。

「兄さん、だいてよ」

問六ア 明らかに砧きぬ子の声であった。その声は磯くさい夜風といっしょにみょうになまめかしく私の耳に聞こえた。

「もう、およしなさいよ、ばかね！」

こんどは彼女の母の声だった。

「いやよ、だいてよ、もう一度だけ」

きぬ子と言うと、

「うるさいな」

問六イ そんな太い男の声がした。と、やがてどっこいしょと言うかけ声といっしょに、きやあ、きやあ嬌声を上げているきぬ子の声が、静かな夜の海辺にひびいた。きぬ子は若い男の手によって高くだき上げられている風であった。

「ああ、らく、らくだわ。おうちまでこうして歩いて行って！」

「じょう談言ってはいけない、降ろすぞ！」

「いや、もっと」

と、やがて、

「ひどいわ、いきなり降ろすんだもの。下駄^たがどこかに飛んじやったじゃないの」

砧きぬ子の明らかにとがめる口調だった。

「探してよ」

「そこらにあるだろう」

「いや、探して！」

問六ウ

少女とは思われぬヒステリックな声のひびきだった。

「帰りましょう」

そんなことに取り合わない風で、きぬ子の母の声が一、二間離れたところで聞こえた。

問七

私は、なぜか、その時、たまらなく、きぬ子をだき上げたその男がにくかった。兄さんときぬ子が呼んでいから、彼女の兄さんかも知れなかったが、私は松の木の上で、何となく二人は兄妹^{きょうだい}でないような気がした。

三人の話し声が遠くなってから、私は松の木から砂浜の上に飛び降りた。

家へ帰ると、父はまだ酒を飲んでいた。父はもう、私をしからなかった。その時、そばにいる母の言葉で、
は、砧家へ親せきの大学生が二、三日前から来ていることを知った。

問八

やはり兄妹ではなかったなと思った。私はその夜、生まれて初めて、パインナップルというものを食べた。その
の甘美な味はいつまでも口中に残らないで残った。

その翌日の夕方、私は、きぬ子と彼女の母といっしょに海岸を散歩している青年の姿を見かけた。ゆかたのうでをまくって歩いている青年の姿は、きぬ子の兄どころか、父とでも言いたいほどの、年れいの開きを持っている人物のように思われた。私が、昨夜、想像していたような若い男とはちがっていた。

私はなぜか、ひどく当てが外れたような気がした。しかし、きぬ子が、その青年のうでにぶら下がつては歩いているのを見ると、私の心にはやはりしっとに似た感情がわいた。

二人は何か話しているらしかったが、遠くからでは何も聞こえなかった。が、やはり、昨夜のように、きぬ子は、あの聞いていて心をとろかすような嬌声を上げて、きゃあきゃあ言っているのではないかと思った。

そう思った時、やはり、私はその青年がこの海岸に現れたことを快しと思わなかった。

長い海岸線の途中で、きぬ子と母の二人は青年と別れて家の方へ引き返して行った。青年一人だけがなおも、波打ちぎわを歩いて行くのを見ると、私は、そこからかけ出して、遊び仲間の料理屋の輝夫てるおを呼び出した。

「きぬ子をいじめる東京のやつがいる。いけないやつだ。やつつけよう」

と私は言った。

問九
「そうか、よし!!」

輝夫も、きぬ子と聞くと、舌でくちびるの周囲をやたらになめまわし、興奮した目の色をした。

輝夫はほら貝を吹いて往来を歩いた。二人はそろって青年集会所の火の見やぐらの前に行った。五分すると、部落の子供たちが集まって来た。十五、六人そろくと、舟大工ふなの仕事場の裏手の切岸きりぎしの上に移動した。

「いけないやつが浜を歩いているので、これから行ってやつつけるんだ」

私はみんなに命令した。

夕ご飯を食べていないという子が三人あった。その三人に、早く食べて再びここに集まるように言った。それから十五分ほどして、私たちは松林の一隅ぐうに勢ぞろいした。

夕暮れの浜には、風がふいて、散歩している人の姿も見えなかった。

〔注10〕
せっこうに出した雑貨屋の三津平みつへいが、馬にでも乗っているような調子を取ったかけ方で、波打ちぎわを遠くからこちらにかけて来るのが見えた。

「みさきの突端とったんで歌をうたっていた！」

彼は、私に報告した。

やがて、二番のせっこうが帰って来た。彼は負傷していた。どこかで転んだと見えて、ひざこぞうをすりむいていたが、彼もまた興奮していると見えて泣きはしなかった。

「歌をうたっている！」

彼もまた言った。

私たちは、それから二丁ほど、みさきに近い方へ位置を移動し、新しく三人のてい察を出した。

二人のてい察が帰って来ての報告によると、彼は砂浜にこしを降ろし、夕暮れの海をあかずながめており、時々立ち上がると何か歌をどなり、またこしを降ろして、海面に見入っていると言うことであった。

最後のてい察が、

「来るぞ、どろ棒がこっちにやって来るぞ！」

と言いながらかけこんで来た時は、暮れなずんだ海が、一枚のうすずみ色の板に見えるほど、辺りに夕やみが立ちこめていた。

「どろ棒じゃあない、お化けだろう」

と、一人がてい正した。

私と輝夫の二人は、彼らに、これからしゅうげきする人物が何者であるかは説明していなかった。

子供たちは、それぞれ、自分たちで勝手な解しゃくを下して、それに対してめいめいそれぞれの敵意を燃え上がらせていた。

みんな小石を拾って、ポケットやふところにねじこんだ。盾のつもりか、板子などをだいている子もあった。

大学生は波打ちぎわを歩いて来た。その姿が小さく見えると、私たちはいっせいにかん声を上げて、その方へかけ出し、彼とのきよりが半丁ほどのところで散開すると、いっせいに石を彼に向かって投げ出した。彼の立っている地点に届かない石もあれば、彼をこえて海へ落ちる石もあった。

とつ然のしゅうげきにおどろいた大学生は、何かさけびながら地面にふした。そしてやがて立ち上がると見るとこちらにかけ出して来た。ひどく勇敢だった。

ばらばらと、私たちはにげ出した。

途中で、私たちは立ち止まり、二回目のしゅうげきを開始した。見ると私の周囲には五、六人しかいず、他の連中は、こわくなったのか、松林の方へにげ続けていた。いくら私たちが石を投げて、大学生はかけて来た。私たちは再び、またにげ出した。松林の入口で、私たちは三度目にふみとどまった。その時は、私と輝夫の二人きりだった。

「つかまるぞ、にげよう」

輝夫は言った。

「よし、にげよう」

私はあいづちを打って、松林の中へかけこんだが、私は立木の一つに身をかくすと、にげるのをやめた。にげ

てなるものかと思った。そして、松林の入口で立ち止まっている彼の方へ石を投げた。

大学生は、あたりをきよるきよる見まわしていたが、二番目の石が彼の立っている近くの松の幹にぶつくと、いきなり見当をつけて私の方へかけて来た。

私は松林の中をくるくるまわり、時々、立ち止まっては松の幹の間から姿を現して石を投げた。私、人が最後まで敢闘した。石はほとんど大学生にはぶつからなかった。それが、私には、いまいしかった。

そのうちに、夜のやみが全く、松の木も大学生の姿ものんでしまった。私は息をはずませながら一本の立木もたれていた。手や足の方々が痛かった。至るところ負傷しているらしかった。

私は浜の方へ出て、草むらから雑草の葉をむしり取ると、それをひざ頭や手首の負傷かしょへなすりつけた。

問十

私は、戦い終わったものの感傷で、暗い海をながめた。くもっているせいか、海には一点の漁火も見えず、船体の見えない漁船が、エンジンの音を海面の遠くにひびかせていた。

それから三日目に、この夏の最後に引き上げて行く避暑客として、砧一家はバスでこの村を離れた。ちょうど登校時の、二番バスだった。大学生はいつか帰ったものと見えて、砧家の一行の中には姿を見せなかった。きみ子と彼女の両親と女中の四人だった。砧家の人々がバスに乗りこむのを私たちは今日はおとなしく遠くからながめていた。

バスの中に一行が収まってしまうと、じょじょに私たちはバスに近寄って行った。私たちがバスの一、二間近

問十一

しょう

くまで行った時、バスは動き出した。私はとつ然、自分でも理解できぬ衝動を感じて、バスを追いかけて走り出した。私にまねて、子供たちはみんな走り出した。一丁ほどかけてとまったが他の連中はとまらず、どこまでバスといっしょに走って行った。間もなく、一人ずつバスから落伍した。最後に一人だけバスの横手を必死になっ

問十二

てかけている少年の姿が見えた。輝夫だった。学校かばんがじゃまになると見えて、彼は途中でそれを路ぼう

すると、もうこうなってはどこまでも追いかけて行くぞといったかつ好で、海沿いの道を走っていた。彼はバスといっしょに村外れの小さいトンネルに入ったが、バスがぬけ出た時は、そこに輝夫の姿はなかった。彼はトンネルの中で落伍したものらしかった。

問十三

その日は、完全に夏が終わって、村へ秋がやって来た日であった。夏が完全ににげ去ってしまう合図に、夕方から夜にかけてひどい雷雨が海浜^{ひん}一帯の村をおそった。

(井上靖^{やすし}『晩夏』)

〈注1〉船の底にしく板

〈注2〉相手を生かしてはおけないと思うくらい強いうらみやくしみがあること

〈注3〉砦^{はく}家が宿泊^{はく}している宿

〈注4〉お金の単位

〈注5〉地位や身分が低くいやすいこと

〈注6〉お手伝いさん

〈注7〉夜、海などで魚をさそい集めるために船でたく火

〈注8〉長さの単位。一間は約一・八メートル

〈注9〉なまめかしい声

〈注10〉敵軍の動きや敵地の地形などをさぐりに行くための兵士

〈注11〉長さの単位。一丁は約百九メートル

問一 ――部A・Bと同じ意味で用いられているものをそれぞれ選びなさい。

A 目をこらす

- 1 久しぶりに映画を見に出かけたAさんは、最新の映画館の設備のすばらしさに目をこらした
- 2 人気歌手の目をこらすほどのりりしさに夢中になったBさんは、さっそくポスターを買い求めた
- 3 古美術品のコレクターであるCさんは、めったに市場に出回らない目をこらした一品を入手した
- 4 バレエの審査会に出場したDさんは、ライバルの一挙手一投足を見のがすまいと目をこらした

B 当てが外れる

- 1 四国に來れば本場の讃岐うどんの店がたくさんあると思ったのに、近くに一軒もなくて当てが外れた
- 2 天気予報では荒天とあったが、山の天気は必ず当てが外れるものだから登山を決行しても良いだろう
- 3 私たち野球部の実力では全国大会出場など考えられなかったが、思いがけず当てが外れて喜んだ
- 4 たとえ固く約束しても彼が時間通りに來たためしはないから、やはり今日も当てが外れるだろう

問二 ――部「『魚を持って來ました』私は縁先の物干しの棒のところに立ち止まって、よそ行きの言葉で言

た」とありますが、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 お得意様への大切な仕事を任されてはこらしい気分である
- 2 ふだんいやがらせをしているきぬ子の家なので、気まづくなっている
- 3 きぬ子が出て來ることを期待して良いところを見せようとしている
- 4 子供が配達に來たからと見下されないように大人っぽくふるまっている

問三

——部「私は口がきけなかった」とありますが、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 思いがけずきぬ子本人が応対に出て来たうえに、何のこだわりもなく親しげに言葉をかけてきたので当わくしている
- 2 大人っぽいと思っていたきぬ子を間近で見ると、想像とは裏腹にあまりにも幼い様子だったので落たんしている
- 3 気位が高くとりましているきぬ子に頭を下げて魚を買ってもらわねばならないことがくやくして、ふてくされている
- 4 ふつうの人ならだれでも知っているような魚をものめずらしそうにのぞきこむ世間知らずなきぬ子に、あきらはてている

問四

——部「『父ちゃんが上げておいでって——』私はいきどおったように言った」とありますが、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 ちっぽけな魚の代金をもらうのはなんとなく気が引けていっそあげてしまおうと思いついたのに、自分の親切心があっけなく否定されてしまい、しゃくにさわっている
- 2 魚の代金をもらうことへのみじめさからうそをついて見えをはったのに、そのうそを再び言わないといけない状況になり、早くやり取りを終わらせようと意地になっている
- 3 魚の代金を受け取ろうとしないことで気前の良さを見せたつもりだったのに、本当は余ゆうのない生活をしていることを見すかされ、はじをかかされたように感じている
- 4 せっかくめずらしい魚をプレゼントして喜んでもらおうと思ったのに、意外にも代金のことにとだわってなかなか魚を受け取ってくれないので、いや気がさしている

問五

——部「もう浜はとつぷりと暮れて、海面にはいくつかの漁火がまたたき始めていた」とありますが、「漁火」はどのようなことを象ちょうしていますか。

- 1 代金を受け取らなかった後かい
- 2 きぬ子へのあわい恋心^{こい}
- 3 砧家の生活へのあこがれ
- 4 父への消えない反こう心

問六 「その声は磯くさい夜風といっしょにみょうになまめかしく私の耳に聞こえた」――部ア、「きゃあ、

きゃあ嬌声を上げているきぬ子の声が、静かな夜の海辺にひびいた」――部イ、「少女とは思われぬヒステリックな声のひびきだった」――部ウ）とありますが、「私」はきぬ子の声からどのようなことを感じ取っていると考えられますか。ア・イ・ウそれぞれにふさわしいものを選びなさい。

1 若い男にかまってももらえる喜びで異常なくらい興奮していること

2 日ごろからちやほやされて育ったせいでわがままな性質であること

3 若い男に愛情を示してもらうことで安心したいという願望があること

4 子どもらしい無じゃ気さと大人の落ち着きが同居していること

5 若い男をなんとしても自分の思い通りにしたいという欲望があること

6 美しくきゃしゃな少女には似合わない粗野そやな一面を持っていること

7 若い男がうっとうしがっていることにも気づかずどん感であること

8 若い男に対してただのあまえだけではない特別な感情があること

9 自分をないがしろにする若い男を見返そうとやっきになっていること

問七 ――部「私は、なぜか、その時、たまらなく、きぬ子をだき上げたその男がにくかった」とありますが、

このときの「私」の気持は、別の表現で言うところのどのようなものですか。本文中から十字以内でぬき出しなさい。

問八

——部「やはり兄妹ではなかったなと思った。私はその夜、生まれて初めて、パインナップルというものを食べた。その甘美な味はいつまでも口の中に消えないで残った」とありますが、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 生まれて初めて食べたあまいパインナップルの味で、貧しい自分の生活とゆう福なきぬ子の生活との差を思い知らされてみじめになっている
- 2 海辺の村ではふだん食べることのないパインナップルの味に、きぬ子の洗練された美しさが思い起こされ、きぬ子に会いたい気持をつのらせている
- 3 あまくておいしいパインナップルの味がきぬ子と若い男との仲むつまじさを思い出させ、二人の間に入りこむ余地はないと苦い敗北感にさいなまれている
- 4 初めて食べたパインナップルのあまい味とこれまで聞いたこともなかったきぬ子のところけるようなあきえた声とが重なり、頭から離れなくなっている

問九

——部「『そうか、よし!』輝夫も、きぬ子と聞くと、舌でくちびるの周囲をやたらになめまわし、興奮した目の色をした」とありますが、この部分からどのようなことがわかりますか。

- 1 輝夫がきぬ子に反発する気持を持っていること
- 2 輝夫が私にライバル意識を持っていること
- 3 輝夫がきぬ子に関心を持っていること
- 4 輝夫がいじめを許さない性質を持っていること

問十

——部「私は、戦い終わったものの感傷で、暗い海をながめた。くもっているせいか、海には一点の灯火も見えず、船体の見えない漁船が、エンジンの音を海面の遠くにひびかせていた」とありますが、この

ときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 大学生を相手にやるだけのことはやりきったものの、勝敗もつかずきぬ子への恋もかなわなかったことを感じ、むなしくなっている

2 大学生を相手に必死で歯向かって子供力ではとうていかなうはずもなく、むぼうな戦いをいどんだ自分の浅はかさを後かいしている

3 最後まであきらめずに大学生と戦ったことにはこりを感じる一方、自分だけを残して仲間たちがみなにげ出したことにさみしさを覚えていて

4 きぬ子をたぶらかしている大学生を追いはらおうとしたが失敗に終わり、きぬ子を助けられなかったという無力感にうちのめされている

問十一

——部「私はとつ然、自分でも理解できぬ衝動を感じて、バスを追いかけて走り出した」とありますが、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 バスが動き出したことでもう来年の夏まできぬ子に会えないことに気づき、あいさつ一つできなかった後かいで胸がいっぱいになっている

2 バスが動き出したとたん、このままでは自分の存在がきぬ子に忘れ去られてしまうのではないかとあせり、自分をおさえられなくなっている

3 バスが動き出したことで本当にきぬ子がここからいなくなってしまうという事実をつきつけられて、いてもたってもいられなくなっている

4 バスが動き出したとたん、これまで何度もきぬ子からかってきたことが次々と思い出され、申し訳なさでいたたまれなくなっている

問十二 「」部の場面はどのようなことを表していますか。

- 1 情熱を最後までつらぬき通して走り続けた結果、少年が大人へと成長したということ
- 2 どれだけ思いを寄せても、別世界へと帰っていくきぬ子には手が届かないということ
- 3 激しい闘争心も、ライバルたちのだつ落によっていとも簡単に失われていくということ
- 4 海辺の村の子供たちに向けていたきぬ子の思いが、だんだんと消えていくということ

問十三 次の問に答えなさい。

① —部「その日」は、「私」が砧家が宿泊している角屋に魚を届けてから何日目ですか。角屋に魚を届けた日は数えずに答えなさい。

② 「私」は村の学童たちのなかでどのような存在ですか。

③ 砧家はどこから来ましたか。本文中から漢字二字でぬき出さない。

④ 砧家は何人で来ましたか。

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

問一

図書館には、相談係とか参考係というデスクに司書を置いています。蔵書の利用だけでなく、図書館で働く人の知識や経験を利用できるのです。この人は、本の世界の道案内人ですから、読者が目的の本を見つけるまでは、本だなのあいだを歩いていっしょに探してくれます。

でも読者に代わって本を読み、問題を解決することはしません。わからないことを自分で解決できた喜びは、その読者のものです。それがその人の次の問題解決に役立ちます。この質問は、その人のプライバシーの一つで

すから、図書館で働く人はその秘密を守ります。

そして、この本を読みなさい、とおしつけるのではなく、いくつかの本を見せて「この中であなたのお役に立つものがありましたら」というのが本来の方法です。それには図書館員の経験と知識のちく積が必要です。さらに、図書館には選書から始まって「本」の整理や保管、貸し出しに至るまでさまざまな仕事がありますが、その全部がじゅう実し、組織化されて、やっと「本と人をつなぐ仕事」ができます。その一館で解決できない質問に対しては、図書館という組織全体がそれを支えます。

こうした案内を受けるうちに、読者は、自分に必要なものを探す方法を自然に理解するでしょう。司書が本を見せながら具体的に説明することで、それがわかってくるのです。だから図書館は「教えこまれるところ」ではなく、「自分の感覚を働かせて学び取るところ」です。

昔から「読み、書き、計算する能力」を人間の知的能力としてきましたが、今は図書館で「必要なものを探す能力」を身につけるようになったのです。これは、一生使える能力です。こうした学び方にまだ慣れていない人には、必要な手ほどきをします。それが、その人と「本」とをつなぐ入り口になることでしょう。

二一世紀に入って、大きな災害が続きますし、また来るといわれている大震災^{しん}への備えも強調されています。そんな中でとつ然の被害からやっと自分を取りもどした人が、避難生活の中で一人になれる場所を図書館に求め、持ち帰って読む本を探し、次いで被災の処理や連らくのために図書館を使う、という生活のパターンが各地から報告されています。図書館とは本好きの人たちが行く特別なところ、という長い間のイメージが、災害から立ち上がるための一つのよりどころにまで変わってきたのです。それには、災害発生以前の図書館サービスが

あってこそ、です。

もう一つ大事なことは、子どもたちのことです。大人は図書館の復興を待ってくれますが、子どもたちの心の痛手に対しては、最初の一週間が大事だ、といわれています。読み聞かせにもお話にも、絵本の提供にも、大きな恐れに直面した子どもたちの心をいやすこまやかな配りよが必要です。これもまたふだんからの準備と、災害後すぐに動きだせる態勢、行政の理解と施策が必要ですし、子どもの成熟と成長にかかわる人たちみんなで考え、準備を重ねるべきことの一つでしょう。図書館はそのための本の供給源であり、混乱の中にあっても、実施の場として働くのだと思います。

(竹内^{タケウチ} 哲『生きるための図書館——一人ひとりのために』)

問一 — 部「図書館には、相談係とか参考係というデスクに司書を置いています」とありますが、「相談係

とか参考係」の司書の仕事について答えなさい。

- ① 「すること」は何ですか。一つ書きなさい。
- ② 「しないこと」は何ですか。一つ書きなさい。
- ③ 「必要なこと」は何ですか。一つ書きなさい。

問二 二一世紀に入って災害が発生する以前、図書館はどのようなイメージでしたか。本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問三 — 部「災害から立ち上がるための一つのよりどころにまで変わってきたのです」とありますが、災害以後人々は図書館をどのように使うようになったのですか。本文中の言葉を用いて四十字以内で具体的に書きなさい。

問四 自然災害の直後、被災した子どもたちは被災地のためにどのようなことができますか。図書館以外の例を

挙げ、あなたの考えを二百字以内で書きなさい。

〔三〕 次のA・Bの文の――部と言葉の動きが同じであるものを選びなさい。

A 姉はおおらかな心の持ち主である

- 1 積極的な姿勢で行動することが大切だ
- 2 まだ二月なのに今日は春のように暖かい
- 3 引っ越しの際に大きな家具を運び出した
- 4 宝石を散りばめたような星空をながめた

B 博士の考え出した理論は正しかった

- 1 父の古いうで時計をゆずり受けた
- 2 そこにかかっている黒いぼうしは兄のだ
- 3 妹はもうこの本を読まないのだろうか
- 4 母の作った手料理でおもてなしをした

〔四〕 次の――部1～5のカタカナの部分を書きなさい。また――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

お湯をサ¹ます

事態をラッ²カンする

カクシ³キを重んじる

変化にト⁴む

キン⁵トウに分ける

本末⁶転倒^{とう}

豊満⁷な花の香り

チラシ⁸を刷る

（問題は以上です。）

*問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一ぱんに使われている漢字またはひらがなに改めるか読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたりけずったりしたものもあります。

